

読んだら最後、
小説を書かないでは
いられなくなる本

太田忠司

「僕にも、
書けました！」

小説を書いてみたいと思っているけど、

まだ書いたことがないひと。書きはじめてはみたけど、

どうしてもうまくできずに **途中でやめてしまった**ひと。

この本は、そんなあなたのために書かれました。

読んだら最後、小説を書かないではいられなくなる本

太田忠司

星海社

307



太田忠司といひます。小説家です。

一九八一年、大学四年のときに「ほしんいち星新一ショートショート・コンテスト」で「帰郷」という作品が優秀作に選ばれ、初めて自分の書いた小説が活字になりました。

一九九〇年、『僕の殺人』という書き下ろし長編小説が最初の著作として出版され、以後は専業作家を続けています。二〇二四年四月現在、著作は百十作（文庫化や再出版を合わせると百七十七冊）です。

作家生活も三十年を超え著作も増えていくうちに小説を書くための知識と経験も、それなりに得てきました。最近では小説の書きかたを教えるワークショップや、非常勤講師として大学で創作方法について教える機会も増えています。

この本は、主に大学で教えたときのノートを元に、小説を書くために必要なこと、知っていたほうがよいことを、まとめたものです。

最初に、この本を誰に読んでもらいたいかを明確にしておきます。

いや、本なんて誰が何を読んでもいいじゃないか、と思われるかもしれませんが。そのとおりです。誰が何を読んだっていい。でもこうした本は読者を想定して書かれるものです。小説を書いてみたいと思っているけど、まだ書いたことがないひと。

書きはじめてはみたけど、どうしてもうまくできずに途中でやめてしまったひと。

この本は、そんなあなたのために書かれました。

約束します。この本を読んで実践すれば、あなたも小説を書くことができます。

そのためのノウハウを、僕が知っているかぎり詰め込みました。

もちろん、実際に書くかどうかは、あなた次第です。さつと眼を通してそれで終わり、でもかまいません。プロ作家がこんなことを考えながら小説を書いているんだな、という読み物としても面白いものになっていると思いますから。

でも、どうせなら、小説を書いてみませんか。

自分だけが書ける物語を、形にしてみませんか。

あなたには、それが可能なのですから。

はじめに 3

第一講

小説を書きたいのに書けないのはなぜか？ 9

第二講

いきなり小説を書いてみる 19

Column 担当編集さんの実作例 33

第三講

アイデアを練る 45

第四講

文章力を鍛える 61

第五講

キャラクターを立てる 91

第六講

物語を作る 115

第七講

実例としての自作解説 135

第八講

世界を創る 153

第九講

資料を探す／取材する 169

第十講

長編を書く 183

Column 『タイトルは小説の顔』
199

第十一講

プロ作家になりたいひとへ
203

Column 『小説の書き方を教える』
212

おわりに
216

第一講

小説を書きたいのに書けないのはなぜか？

初対面のひとと名刺交換などをしたとき、僕の仕事をすると、相手がこう言うことがあります。

「小説を書いているんですか。すごいですね。じつは私も小説を書いてみたいなあと思ってるんですよ」

こんなことを言うひとの大半が本当は書く気なんてないことは、僕にもよくわかっています。ただ僕と話を合わせるために、言ってみたりしているだけでしょう。まあ、そんなことを口にするってことは、心のどこかには少しばかり「小説を書いてみたい。小説家になってみたい」という願望があるのかもしれないが。

でもたまたまに、本気で小説を書いてみたいと思っていて、僕に話しかけてくるひとがいるんですよ。たまたまですけどね。

あ、もしかして、あなたもですか？

だったら、この先も読んでみてください。

「小説を書いてみたい」

そう話すひとに出会うたび、僕は思います。書きたいなら書けばいいのに、と。

僕は小説を書きたいと思い、書いてきた人間です。そこには何の迷いも躊躇ためらいもありませんでした。だから書くことに二の足を踏むひとたちのことが、最初はよく理解できませんでした。書きたいのに、なぜ書かないのだろうかと思議に思っていたんです。

でも、そう簡単な話ではないようです。多くのひとは小説を書きたいと思いながら書けないでいるのだと、そういうひとたちと何度か話してみてもわかりました。そのひとたちが書くことに躊躇ちゅうちよしている理由についても、いくらかわかつてきました。

僕の考察では、書きたいけど書けない理由には以下のようなものがあります。

① 創作方法に対する理解不足

「話が思いつかない」

「キャラクターが作れない」

「話を思いつけても、どう結末をつけたらいいのかわからない」

こんな理由で書くことに躊躇しているひとたちがあります。

でもじつは、そんなひとの頭の中にも書いてみたい話のタネとかキャラクターのイメージとか、ぼんやりとですが小説にしたい「思い」のようなものは存在しています。だからこそ書きたいと思っているんですね。でも書けない。

なぜなら頭にあるものをうまく言葉に変換できないでいるからです。

この本では、そうしたモヤモヤしたものを形（言葉）にする方法を説明していきます。

約束します。この本に書かれている内容を実践すれば、小説は書けます。安心して読み進めてください。

② 批評されることへの恐怖

「書いてもつまらないものにしかならないのではと躊躇して書き出せない」

「^{けな}貶されるのが怖い」

「こんなことを考えてるんだと笑われるかも」

そんな思いに押し潰されて、書き出すことを躊躇っているひとも多くいるようです。

これは僕も、よく理解できます。

書いてもつまらないものにはかならないのでは、という懸念は、今でも小説を書いているときに自分が感じているものです。書いてみたところであまり面白くないものにならないんじゃないかと、そういうネガティブな気持ちが湧きだしてくるのをなんとか抑え込みながら、毎日キーボードを叩いています。

書いたものを貶されるのではという不安も、ずっと付きまとっています。小説を世に出すことを仕事にしている以上、批評や評価に晒さらされることは避けられません。僕だって書いたものを貶され、自分自身を貶されたように感じて凹へこんでしまう経験を何度もしています。これからも経験するでしょう。

貶されるより、もっと怖いこともあります。まったく何の反応も得られないことです。頑張っても書いても感想をもらえない。もしかしたら誰も読んでくれないのかもしれない。いと、そんな疑心暗鬼ぎしんあんきに駆られてしまうこともあります。

でも、書くことをやめようとは思いません。書きたいからです。

なぜ書きたいか。それは書くことが好きだからです。

好きな小説を読んで味わった感動を、自分でも生み出してみたい。そんな思いが消えないからです。

もしもあなたが小説を書きたいと思った理由も同じものなら、躊躇いを振り払って書いてみてください。

小説は何を書いてもいい。下手とか上手いとか関係ない。破綻していても矛盾していても世間のモラルに反していても何でもいい。失敗作上等です。

自分以外の誰にも書くことを止めることなんてできません。好きなように書いてください。

ただ、それ自分以外の誰かが読んだとき、そのひとからの感想を聞かされることは覚悟してください。

ときに耳の痛いことも言われるでしょう。的外れにしか思えない感想を聞かされることもあります。予期しない悪意をぶつけられることも、ある。

それどころか、読んでも何の反応も示してくれないで、無視されるかもしれない。

でも、それを受け入れることもまた「小説を書く」ということなのです。

ただ誤解しないでください。「受け入れる」とは、相手の言っていることが正しいと納得することではありません。

相手の意見を拒絶してもいい。忘れてもいい。反論はお勧めしなくてもいい。忘れたら喧嘩けんかを買ってもいい。

作品を世に出したら読者から何らかの反応があること（あるいは反応がないこと）を当然のこととして覚悟を決める。それが「受け入れる」ということです。

もちろん読者からの反応は否定的なものばかりではありません。ときに一生の宝物になるような素敵な感想をもらえることもあります。

僕がいただいた最も印象に残る感想は「あなたの本に救われた」です。

あなたが読んできた小説に救われてきたように、あなたが書いた小説で誰かが救われるかもしれません。そんな誰かに向けて、書いてみてください。

③ 小説を書く時間がない

「書きたいと思っっているんだけど時間がなくて」

これも本当によく聞く「言い訳」です。

小説を書くためにまとまった時間が必要だが、日々の暮らしの中でそういう時間を確保するのは難しい、と尻込みをしているんですよ。

でも、そんなことはありません。時間はいくらでもあります。本気で小説を書こうと思っているなら、ね。

個人的な話をします。僕が最初の長編『僕の殺人』を書いたのは一九八〇年代の終わりでした。その頃の僕は自動車部品メーカーに勤める会社員でした。ちょうどバブル景気が真っ盛りの頃で仕事は死ぬほど忙しかったのです。残業は月に百時間超えが当たり前。土日の休日も出勤で潰れました。二日続けて徹夜して翌日も夜遅く帰ったことがあります。そんな激務の中で僕は出版できるかどうかともわからない原稿を書きつづけました。深夜、疲労で眠ってしまいそうになるのを堪えて数行書き、仕事が入らなかつた休日にはずっと家に籠こもって書きました。そうして二年の月日をかけ、やっと長編を完成させました。

同じことをしろと言うつもりはありません。でも書きたいという気持ちがあるなら、時間を見つけることはできます。帰宅した後のちよつとした空き時間で、テレビやネットを見るのに費やしていた時間を少し振り向けるだけで、小説を書くことができます。いつも

より早く起きて書くひともいます。

長編は難しいというなら短編でもOK。もっと短いショートショートでもいいです。まずは書いてみてください。そして書くことが楽しいなら、もっと長いものに挑戦してみてください。

以上三つの「書けない理由」いずれの場合でも、結局僕が言いたいことはひとつです。

とりあえず書いてみましょうよ。

書いてみれば、なんとかなります。

次の第二講で、その方法を教えます。

Note

まずは「書きたいけど書けない」の気持ちを、「書いてみれば、なんとかなる！」に変えちゃいましょう。

① 「……書きかたがわからない」

→モヤモヤした思いを言葉に変換する方法を学べば大丈夫！

② 「……評価されるのがこわい」

→反応を受け入れるのも「書く」ことの一部。
大丈夫、あなたの書いたもので救われるひとが必ずいる！

③ 「……時間がない」

→小説は、ちょっとした空き時間でも書けるんです！
本気ならね！

ほらほら、とりあえず書いてみましょうよ！！
そんなあなたは、第二講へ、レッツゴー！！

第二講

いきなり小説を書いてみる

これから小説の書きかたを伝授しようというのに、その最初の一步が「小説を書け」というのでは、戸惑われてしまうかもしれません。

でも僕がまずあなたに伝えたいのは、小説執筆の実感です。小説を書くというのはこういうことなんだとわかってもらいたい。

なので、早速書いてもらいましょう。

さて、小説を書くために必要なものは何か？

ここでは、すぐく大雑把にふたつものを挙げます。

「文章」と「アイディア」です。

これだけあれば、なんとかなります。

このうち文章については、あなたがこれまで生きてきた中で手に入れた文章力だけでかまいません。

小説を書くためには特別な文章力が必要である、などと考える必要はありません。

小説を書くための文章力向上の方法については後に説明しますが、今は手持ちのもので間に合わせましょう。

アイディアには手持ちのものが無いかもしれないので、生み出すための方法を教えます。

ここでは小説を書く作業を、**車を動かす過程**になぞらえましょうか。

その場合**アイディア**とは、**エンジン**です。

ガソリンに点火し、**エンジンを駆動させ、車を発進させる**。

まずはガソリンに火をつけましょう。

僕はよく、小説を書くためのワークショップや大学での講義で参加者や学生のひとりを目指し、即興で思いついた「**動詞**」を言ってもらいます。それからまったく別のひとに「**名詞**」を言ってもらいます。

たとえば動詞として「**食べる**」、名詞として「**眼鏡**」が出たとしましょう。

「**食べる眼鏡**」……奇妙な言葉ですね。これがエンジンを動かすためのガソリンとなります。

もし「**食べる眼鏡**」なるものが存在するとしたら、どんなものでしょうか。

眼鏡が何かを食べる？

眼鏡を食べることができる？

食べるときに使う眼鏡？

こんな感じで想像を働かせることでガソリンに点火します。

そしていくつか想像した中から、面白くなりそうなもの、話を広げられそうなものを選びます。

今回は「何かを食べる眼鏡」という発想を選びましょう。

「何かを食べる眼鏡」とはどんなものか？

思いついたのは、かけている人間を食べてしまう眼鏡。怖いですね。

では次に「食べる眼鏡」が存在したらどんなことが起きるか、について考えます。こうして点火したガソリンがエンジンを動かすはじめます。

いつの間にか人間が消えていて、そこには眼鏡しか残っていない、なんてホラーめいた状況が頭に浮かびます。

その次は「食べる眼鏡」が起こしたことはその後どうなったか、について考えます。ア

クセルを踏み込むのです。エンジンは唸りをあげて車を疾走させます。

眼鏡をかけている人間が次々と消えてしまう。人々は恐ろしくなつて眼鏡を避ける。でも目を矯正しないと生活できない。だからコンタクトレンズを使うようになる。するとコンタクトレンズのメーカーが儲かり、眼鏡メーカーはどんどん倒産していく。そう、すべてはコンタクトレンズメーカーが企んだことだったのだ……！

エンジンはついに、あなたをゴールに導きました。

以上の内容をまとめてみましょう。

『食べる眼鏡』

人間が突然消えてしまう事件が起きた。ついさっきまでそこにいたのに姿が消えて、そこには眼鏡しか残っていないのだ。

そんな事件が次々と起こった。消えたひとに共通するのは全員眼鏡をかけていたことだけだった。警察が調べてみると、残っていた眼鏡はすべて、ある眼鏡屋がびつくりするほど安い値段で売っていたものだった。

刑事は問題の眼鏡屋に赴いた。店主は怯えながら、

「じつは、あの眼鏡はある業者が持ち込んできたものなんです。卸値が通常よりずいぶん安いので仕入れました。でも事件を知ってあわてて連絡を取ろうとしたんですが、行方不明なんですよ」

と、説明した。その怪しげな業者は、とうとう見つけることができなかった。

その後も眼鏡をかけた人間が消える事件が続発した。人々は眼鏡自体に恐怖を感じ、誰も眼鏡をかけなくなった。

「計画は成功したな」

「はい。もう誰も眼鏡をかけていません」

ある場所で、ある会社の社長と専務がそんな会話を交わしていた。

「これで我々の天下だ」

「我が社の売上はウナギのぼりですよ。万々歳です」

「よしよし」

社長は満足げにうなずくと、自社製品であるコンタクトレンズを眼に装着した。

これで小説が完成しました。

作品としての出来不出来は今では問わないでください。これは即興で書いたものですから。僕自身いろいろと手直ししたい箇所はありますが、あえて原型のままここに掲載します。

関連のない単語を組み合わせて奇妙な言葉を作り、そこからストーリーを考える。

これを実際にやってみてください……と、いきなり言っても難しいでしょうね。まず無関係な単語を選ぶのが結構面倒です。先の例では動詞と名詞をそれぞれ別のひとに考えてもらいましたが、ひとりですれをやる、どうしても関連した単語を思いつきがちなんですよね。

その問題をうまく解決したのは、ショートショート作家の田丸たまる雅智まさともさんです。田丸さんの著書『たった40分で誰でも必ず小説が書ける 超ショートショート講座 増補新装版』には、タイトルのとおり今まで小説を書いたことがなかったひとでも、実践すれば小説が書いてしまえる方法が記されています。アイディア創出の仕組みは僕が説明したものとほぼ同じですが、この本で書かれている方法はとてもシンプルで初心者にも取り組みやすいものです。僕もワークシヨップなどでは田丸さんに了解を得た上で、そのメソッド（手法）を利用させてもらっています。

と、この流れだと肝心の田丸メソッドを紹介するべきでしょうが、それは発明者である田丸さんの本を読んでみてください。ここでは僕なりに考えた方法を説明します。

といつても、そんなに難しいことはありません。

新聞、本、ネットの文章、なんでもいいです。目の前に開いてください。

そこから名詞を五つ、拾いだしてください。

なるべく似通ったところのない名詞がいいですね。似たような名詞しか見つからなかったら、別の文章から選びます。

次に別の新聞記事や本のページなどを開いて、今度は修飾語を五つ、拾いだしてください（先の例では「動詞」を考えてもらいましたが、名詞を説明する言葉なら何でもいいので）。こちらでもできるだけ似ていない単語がよいでしょう。

例として、ネット記事から適当に選んだものをここに列挙してみます。

〔名詞〕

記者 お茶 配信 入門書 寿司

〔修飾語〕

働く 踊る 予想が立てにくい 失敗する 寂しい

次に「修飾語＋名詞」の並びでそれぞれの単語をランダムに組み合わせ、書き出してみます。

「踊る寿司」「働くお茶」「予想が立てにくい記者」「寂しい配信」といった奇妙な言葉が生まれました。

この言葉たちをじっくりと眺め、面白そうだと思った言葉をひとつ選びます。「面白い」の基準はあなた次第です。どうしても選べなければ、眼をつぶって一、二の、三、で指差してもいいです。

ここでは「踊る寿司」を選んでみましょう。この言葉をまたじっくりと眺め、それがどのようなものであるかを想像してみてください。想像のコツは「名詞＋修飾語」と順番を入れ換え、単語の間に助詞を挟んで主語と述語の形にしてみること。たとえば、

「寿司が踊る」「寿司と踊る」「寿司で踊る」「寿司も踊る」

「寿司が踊る」なら、寿司が皿の上で踊ったり歌ったりする。「寿司と踊る」なら回転する寿司と一緒に踊る夢を見る。「寿司で踊る」なら一時期話題になった寿司店で不謹慎なことをする動画配信者みたいなことをする。

発想は馬鹿馬鹿しくていいです。思いついたことを書いてみてください。

それが書いたら思いついたものを**発端**として次に何が起きるか、その**経緯**を想像してください。

「回転する寿司と一緒に踊る夢を見る」という始まりなら、そんな夢を見るのは一回きりなのか、それとも何度も見るのか。見るのは自分ひとりなのか、他のひとも見るのか。その夢を見た後の気分は楽しいのか、辛いのか、あるいは夢の原因を知りたくなるのか、そんなことを考えていきます。

この例では「寿司と踊る夢を見た後、どうしても寿司を食べたくなくなって寿司屋に飛び込むが、食べる前に店の中で踊りだしてしまって食べられない。踊っている客は他にもいて大混乱になる」という流れを考えてみました。

「発端」「経緯」と来て、次は「**決着**」です。事態はどのような終わりを迎えるのかを考えます。

大事なのは「経緯」から何らかの変化をさせることです。変化のパターンはふたつ。

悪いことが起きたなら、何らかの方法でそれを解決する。

良いことが起きたなら、副作用として悪いことが起きる。

例に出した「寿司屋で踊ってしまつて寿司が食べられないひとが続出する」というのは、悪いことですよね。その悪いことを解決するには、どうしてそんなことが起きるようになったのかを考えなければなりません。

もしかしたら集団催眠みたいなもので操られているのかもしれない。

それを仕掛けたのは寿司屋自身だろうか。

寿司屋に行きたくなるような催眠術をテレビCMを使って全国に流したのかも。

でも何かの手違いで客がみんな踊りだしてしまったのだとしたら。

「踊りだしたくなるくらい美味しい○○寿司に行こう！」というCMを放送したら、催眠術にかかったひとたちは寿司屋で踊りだしてしまうようになった。

以上の流れをまとめてみます。

「踊る寿司」

夢の中に回転寿司屋が出てきた。僕はなぜかそこで踊っている。

翌朝眼が覚めたら、どうしても寿司屋に行きたくなった。

我慢できずに飛び込んで、いざ寿司を食べようとしたけど、それよりも先に体が勝手に踊りだして席にもつけない。

見ると他の客もみんな店の中で踊っている。

「踊りだしたくなるくらい美味しい○○寿司！」

店内にそんな歌が流れている。そういえばテレビでこの歌を使ったCMを見た。夢を見たのはその後だった。

次の日、テレビニュースでこの騒ぎのことが放送されていた。寿司屋のCMソングには聴いた者を自在に操る催眠音波が使われていたらしい。ニュースキャスターは続けて言った。

「催眠術の効果は三日で消えるそうです。それまで寿司は控えてください」

ところどころ、小説っぽく体裁を整えています。それが難しいようなら、思いついたこ

とだけをただ書きつらねてもいいです。

あなたも、この例に倣って書いてみてください。

書けたなら、僕から「おめでとう」の言葉を贈ります。

おめでとう。これであなたは小説家になりました。

小説を書いたひとは、みんな小説家です。

もちろんプロではありません。でも小説家を名乗って問題ありません。

もう一度、言います。小説を書いたあなたは、もう小説家です。

Note

小説にとって「アイデア」はエンジン！
まずはエンジンをかける練習を！

【練習 1】

「動詞」と「名詞」を挙げてくっつけてみましょう。

(cf.『食べる』+『眼鏡』)

→面白そうな想像を膨らませる＝ガソリンに点火！

→どんなことが起きるか考える＝車が走り出す！

【練習 2】

「修飾語」+「名詞」をネットや本からランダムに拾って組み合わせる

→「発想」を書き出して、主語+述語の形にしてみましょう。

→「発端」を考えてみましょう。発想から、まず何が起りそうですか？

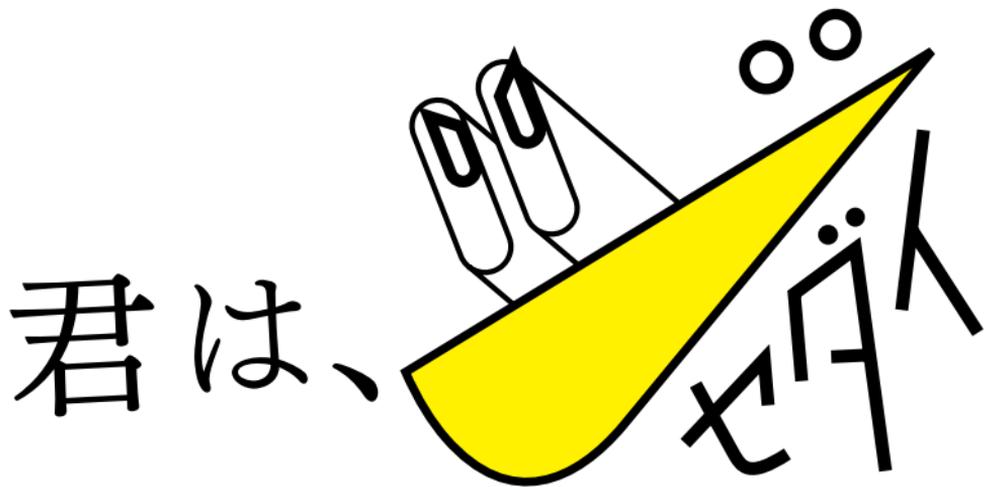
→「経緯」を考える。発端からの流れはどんなでしょう？

→「決着」を考える。「マイナスからプラス」「プラスからマイナス」がポイント。

さあ、いますぐ短編を書いてみましょう！

単語を拾うことから始めましょう、

驚くほど、いますぐ書けちゃいますよ！



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ
ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!